
ありがとう

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう

【Nコード】

N3314S

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

如月ユイー通り名：銀桜。家族から暴力を振るわれ、感情を、光を失った女の子。
転校した高校で出会った全国？1暴走族白竜。
個性豊かな彼らとの出会いに意味はあるのかー？

One

「グッ．．．!!カハッ．．」

狭い路地から聞こえる呻く声。

「ねえ、もうお終い？」

数分前まで数十人の男の声が聞こえたのに。

「喧嘩売る相手、間違えてるよ？」

その男達の中でただ1人立っている影。

「．．．おまつ．．まさか．．．!!」

蒼桜．．．!!」

まだ意識のあった男が呟いた《蒼桜》

「．．．．．正解。でも、もう遅いから。」

蒼桜と呼ばれた者はその男の意識を飛ばした。

《蒼桜》．．．．．1年程前から急に現れた。

汚い事を行う族を潰していく。

性別不明。

名前不明。

容姿も分かっているのは、

髪の色と瞳の色のみ。

「はあ．．．．．」

蒼桜．．．．．それは1人のある少女。

金髪にエメラルドブルーの瞳。

引きつけられるような綺麗な顔。

それが雨城瑠羽【アマシロルウ】彼女だ。

「明日．．．．．か．．．．．久しぶりだな．．．．．」

彼女は明日から高校へ行く。

彼女はある人との約束のために行くのだ。

「ねえ．．．どうして私を人と関わらせるの？

貴方はこうなる事が分かってたの．．．？」

彼女は独り、呟きながら眠りに堕ちた．．．

T W O

「うわー．．．カラフル．．．」

私は今校門の前にいる。

校舎は意外に綺麗だったけれど、

不良校だけあって生徒はカラフル。

私は一応茶髪に茶色のカラコン。

それより理事長室．．．どこ？

近くの不良クンに聞いてみよ．．．

「あの、理事長室ってどこですか？」

振り向いた彼はモテる部類と思われる、
整った顔．．．イケメンだった。

「理事長室？ああ、1階の1番奥。

扉が目立つからすぐわかると思うよ」

へえ．．．意外と丁寧．．．。
一礼してから理事長室に向かった。

コンコンッ

「失礼しま．．．．え？」

理事長室を開けて驚いたのは、
中にいた人が漫画を読んでいたからじゃない。

「臯月．．．」

なんで？どうして貴方がここにいるの？

「勝手に入ってんじゃない．．え．．？
．．．．ッ！？瑠羽！！！！」

ギュッ．．．

「．．．久しぶりだね。臯月」

本当、久しぶり．．．．1年振りだね．．．．

「瑠羽ッ．．．俺らがどれだけ心配したと
思ってたんだよ！！志紀の暴走止めるのも
大変でッ．．．アイツ何回も死のうとして．．」

志紀．．．なにやってんの？駄目じゃん．．．
志紀まで死んだら私も死んじゃうよ．．．

「うん．．．ごめん、ごめんね．．．。
でもこれだけは約束して？
志紀には私の事言ってもいいけど、
他は駄目だよ」

志紀は死なれちゃ困るから。
でも他の皆は死んだりしないだろうし．．

「でも瑠羽、ここに「皐月、転校生まだ？」

理事長室の扉が開き、誰かが入ってきた。

「って何やってんの！？転校生襲うなよ！！」

――――陸都

なんで貴方まで？

扉に背を向けてるから私の顔は見えない。

「離せよ、転校生」

「嫌だ」

「っーかお前女嫌いだよな！？」

「瑠羽は別だ」

「そうだろ！？お前は瑠羽さんだけなら・・・え？」

やっと・・・気付いたかな？

「え？ちよっ・・・瑠羽さん・・・？」

ゆっくり皐月から離れて振り向いた。

「久しぶり、陸都」

少しだけ微笑んで言うと、
陸都の瞳がウルウルしだした。

「る．．．うさ．．．瑠羽さああん！！」

　　「ただ捜したと思っただけですかあ！？
　　いくら捜しても何も分かんないしー！！
　　志紀さんも怖いしー！！！！」

　　さっき似た内容を皐月に言われたような．．．

「って髪と瞳どうしたんですか！？」

「スプレーとカラコンだよ」

　　あの人綺麗だと言ってくれた色を手放す事は出来ない。

「よかった．．．もう逢えないと思ってました」

「ねえ？皐月、陸都」

「ん？」「」

「時間、いいの？」

「ココー応学校だからHRとかないの？」

「「あ！！！！！」」

忘れてたんだ・・・・・・・・・・？

「早く行けよ、陸都！！」

「分かってるよ！！行きましよう瑠羽さん」

Three

「でも本当吃驚しましたよ！」

アイツらも喜ぶでしょ」「陸都」

廊下を歩いて、教室へ行く途中。

陸都にも言わなければいけない事。
言えば悲しむだろうけど……

「お願いがあるの」

「なんですか……？」

大体予想がついたのか、顔が歪んでいる。

「志紀以外には言わないで欲しいの」

皆にとって大切な人を……
何千人の人に慕われていた人を……
奪ってしまったのは私だから……

「ッ．．．有輝の事は貴女の所為じゃない！！
あいつ等だけじゃないんですっ．．．
下の奴らも貴女がいなくなつて
悲しんでた．．．．．」

だつて．．．総長だつた有輝がいなくなつて、
蒼龍が解散したのは私の所為でしょう？

「でも、私はまだ逢えない．．．．．」

「分かりました．．．志紀はいいんですね？」

「ええ．．．」

明らかに沈んだ陸都が教室に入つて行つた。
ざわざわしていた教室も一気に静まる。

「瑠羽さん．．．どうぞ」

呼ばれて入っていくとまた騒がしくなる。

「るせえ．．．．」

聞こえるか聞こえないか位の声で呟いてるのに
クラスはまた静まり返る。

陸都 . . . 一度キレたんだ

「瑠羽さん、自己紹介してください」

「雨城瑠羽。よろしく . . ?」

あまりよろしくしたくないけど。

「席は後ろの窓際です」

やっぱり転入生ってそこなんだ？

日当たりよくてよく寝れそう

「 ?」

でも何故か周りは空席。

まあどうでもいいや 寝れば。
早速寝る体制に入ると、周りがヒソヒソ。

「おい、あの子やベエって」

「陸都さんの授業で寝るなんて
死ににいくような物じゃん・・・」

ガラッ

「りっくん遅刻してごめーん!!」

「皆おっはよー」

「すみません」

「眠・・・」

「・・・」

・・・煩い。

「またお前等か・・・遅刻ばかりじゃねえか」

陸都も呆れて怒れない程遅刻してんの？

「あれー??あの子誰?」

「顔見えないー!!」

明らかに私の事だよね。
でも無視していつか……………眠いし。

「うるせえ!!瑠羽さんが起きるだろ!!」

いや、起きてるんですけど。

「陸都…………五月蠅い」

「す、すみませんっ!!」

そんなにどもらなくても…………
確かに寝起きは悪いけど。

「えー!!!!りつくくんが謝った!??」

「さん付け!??」

この二人……………本当五月蠅い。

「あれ?君、迷子の子だよね?」

一番まともそうな人を見ると、
確かに見た事ある様な無い様な・・・

「もしかして覚えてない？」

昇降口で会ったんだけど・・・」

あ、あれだ。理事長室聞いた人。

「覚え「瑠羽さん俺よ「陸都」

「はい・・・すみません」

少しは落ち着きなさいよ・・・教師なんだから。

「取り敢えずお前等席座れ・・・」

席に座る時女子に睨まれた理由分かった。
席順がこんなだからか・・・

窓 男男

窓 男男男

窓 私空空

でもこればかりはどうにも．．いや、できる。
私が言えば席を変えてもらえるだろう。
でも窓際がいいし。これでいいか。

Four

「ねえ名前なんて言うの？」

前の席の女顔負けの可愛い男の子が話しかけてきた。

「雨城瑠羽……」

普通ここなら聞き返すところだろうけど
関わるつもりないから必要ない。

「僕は山岸歩夢【アユム】よろしくね!!」

「歩夢抜け駆けすんな!!」

俺、椎名千年【チトセ】よろしくなっ」

「俺は加島昴【スバル】よろしくね瑠羽ちゃん。
後、この眠そうなのが白崎陽【ハル】。
それと佐竹稜【リョウ】」

何故か自己紹介してもらった。

「女．．．お前俺に近寄るなよ．．．」

そして上から目線な白崎陽。

．．．．．自惚れないでよね。

「白崎！！お前瑠羽さんに向かつ「陸都」

流せばいい物をつつかかる人がいるから。

「私は貴方に限らず他も関わるつもりはない」

無表情ではつきり言った。

女に初めて言われたのか、驚いている。

．．．．．めんどくさい。

「はあ．．．陸都、帰る」

もともと財布と携帯、予備のスプレー、カラコンのケースしか入っていない鞆を持ち席を立った。

「明日ちゃんと来てくださいよ?」

こつも簡単に早退を認めていいの?
まあ楽でいいけれど。

「分かつてるよ。じゃ」

微妙に疑われてるようだし、
住所でも送っとくか・・・

――
T O ・ 陸 都

――
家、学校から10分位の × マンションの
最上階

――
T O ・ 瑠 羽 さん

――
さすが瑠羽さんですね!!
ありがとうございますっ

――

授業中の筈なのに返信ある．．．．．
それって教師としてどうなの？

p p p p

家でボーッとしていると、
不意に携帯がなった。

――着信 志紀

一年前から毎日何度も鳴り続ける。
皆、毎日メールと電話をしてくる。

「もしもし、志紀？」

志紀の電話なら出てもいいかなと思って
受話ボタンを押した。

「ーッ！！ルウッ．．．！！！！！」

後ろから声が聞こえるから、
皆も一緒らしい。

「ルウ．．．会いたいよ．．．．．！！
俺、ルウがいないとっ．．．．．」

弱々しい声に陸都と皐月の言っていた事は
本当なんだと確信した。

「私も志紀に会いたい．．．．．
もうすぐ会える筈だから。
死なないでね．．．蜜と大翔には内緒だよ」

「ほんとに．．．？会える？」

「うん。陸都と皐月に聞いてみて？
じゃあそろそろ切るね．．．．．」

「嫌だっ．．．ルウ．．．嫌ッ．．．ブチ．．．ツーツー」

志紀、すぐ。会えるよー！。

F i v e

「あの．．．瑠羽さん？」

「ナニ」

志紀の電話に出た日から三日たった。
次の日でも来るかと思っただけ、
動きはない。

「志紀さんと話したんですか？」

「ええ」

朝の静かな廊下を彷徨っていると、
陸都に会った。

「．．．やっぱり。だからか．．．うん」

一人で納得しないでよね。

意味不明な陸都を置いて教室へ戻った。

ガラッ．．．

不良達の視線が一気に集まった。

「あー！！瑠羽ちゃんやつと来たあつ」

その中には屋上の5人の姿も。

ツチ・・・周りの席はこいつ等だったか・・・

「鞆あるのにいないから捜してたんだぜ？」

なぜ椎名千年達に捜されんの？

「どこいつ「席つけ」」

タイミングよく陸都が入って来て、
HRが始まった。

「転入生がいる。入ってください」

そんな陸都の言葉も聞き流して、
空を見ていた。

女子が奇声をあげてるから、
イケメンなんだろうなあ・・・

「・・・ッルー」

切なそうに、震えた声で私を呼ぶ。
一年前のままの姿を瞳に映して彼を呼ぶ。

「――志紀・・・」

少し。少し微笑んで志紀の名を呼ぶと、
周りそっちのけで早足にこっちへ来た。

「見つ、けた．．．ルー」

ぎゅうっと抱き締められて香る匂いに
なんだか落ち着いた。

会わなかったのは、自分の意思なのに。

「し、志紀さんっ席は．．．」

「ルーの横」

「．．．．ですよね」

恐る恐る聞いた陸都に目もあわせず、
私を抱きしめたままの志紀に陸都も呆れ気味。

「．．．は？え、瑠羽の知り合い．．．？」

やっと反応を起こしたのは椎名千年。
それに何故か呼び捨てだし。

「ルー．．．」志紀、サボろうか」

志紀が聞きたい事、言いたい事は
関係ない奴らに知られたくない事。

「ええ！？堂々とサボらないでください！！」

微妙に教師らしい事を言った陸都は無視して
教室を出た。向かったのは

．．．．．いー屋上

「．．．．．ルー．．．俺を置いてかないで．．．．．
俺は、ルーが居ないと駄目で．．．」

今は六月で暑い。日陰に座った志紀の足の間に
座らされて後ろから抱き締められる形。

「もしかしたらっルー死んでるかもしれない
って思ってた何回も死のうとした。
全部、臯月達に止められたけど」

志紀が泣いているのか、体が震えている。

「志紀、ごめん。置いて行ってごめんね。
次どこか行くときは志紀も一緒だよ」

本当にあの時は有輝の事しか考えれなくて
他まで頭が回らなかった。

「．．．．．本当に？」

「うん。臯月達にはお礼言わなくちゃね、
志紀を止めてくれてありがとうって」

「ん．．．」

泣き疲れたのか志紀はそのまま寝てしまった。
私も動けないから寝てしまおうと瞼を閉じた。

――――

――――

――

「……………ゃん……………る……………ち……………瑠羽ちゃん」

「……………ッん……………」

周りの五月蠅さに瞼を開けば、あの五人。
立ち上がるうにも体が動かないし……………

「志紀、志紀起きて」

手を揺り起こせば目をあけた。

「ルーが先に起きるのって珍しい」

「志紀がこんな所で起きないのも珍しい」

志紀はゆるゆると頬を緩め笑うと
抱き締める力を増した。

「ストオーツプ！！俺等の存在a11無視！？」

無駄に綺麗な英語の発音。

「ルー、此処五月蠅い」

「無視しとけばいいよ」

自分の認めた者しか視界にいれない覚ええない
志紀は椎名千年を知らない。

「瑠羽ちゃんサラッと酷い事言ったよね!？」

五月蠅いのは2名。後は静かだし。

「やっぱり場所移動しよう、志紀」

「ん」

山岸歩夢もムシすると、
隅で2人がいじけ始めた。・・・放置するけど

「臥龍【ガリユウ】」

ドアノブに手を掛けた時、
佐竹稜が口を開いた。

「知ってるか？」

何を言い出すのかと思ったら・・・

「．．．．．全国No．1暴走族」

本当は有輝達がNo．1だったのに。
有輝の死によって解散してしまった。

．．．．．私の、所為で

「貴方達でしょう？臥龍総長、佐竹稜」

S i x

「知つゝ、てた．．．の．．．?」

明らか過ぎる程動揺している山岸歩夢。
椎名千年も明らか過ぎる。

後の三人も分かりにくいくけど動揺してる。

「当然」

私が知らないからこういう態度だと思つてたんでしょね。でも、違う。

「じゃ、なんで．．．?」

「興味ナイ」

蒼龍の深い絆を壊したのは私。

あれ程信頼しあっていた暴走族だったのに。
大切な人を奪ってしまった．．．

「分かつたらもう関わらないで」

踵を返して屋上を後にした．．．

バンッ

「臯月、陸都呼んで」

理事室に行くとソファでDSをしてる臯月。

「俺、いますよ」

お茶を4つ持った陸都がでてきた。
流石、気配で気付いたんだろう。

「蒼桜、あれ私」

陸都のお茶を飲む手が、
臯月のDSを操作する手が、
志紀の私の髪を撫でる手が止まった。

「「はあああ！！？」」

「瑠羽確かにお前の容姿と一致するが

お前は喧嘩も俺等より強いが！！！！

お前夜行性じゃないよな！？

夜めちゃめちゃ弱いよな！！？」

「瑠羽さん何危ない事してんですか！？

汚い族一人で潰してるらしいですよね！！！！

今度から俺も連れてって下さい！！」

志紀は何も言わないけど、
多分、呆れてる。

「ねえ志紀、家どうしたの？」

地元から此処までそう離れた距離じゃないけど
蒼龍の倉庫に住んでる志紀にとっては遠い。

「こっちで住むけどまだ見つかってない」

「じゃあ、私の家に住む？」

っていつか住んでほしい。
私には志紀がいた方がいい。

「．．．．住む」

志紀に私の心情が分かったのか、
志紀自身私が必要なのかわからないけど
恐らく両者だろう。

「えー！！俺も瑠羽さんの家に住みたい！
．．．．．ごめんなさい」

陸都の言葉は志紀の殺気により抹消。

「瑠羽と志紀そろそろ帰れよ。
とっくに下校時間過ぎてるぞ」

珍しく皐月が教師らしい事を言ったのに
理由がなんとも自己中。

「お前等が帰らねえと俺が帰れねえ」

・・・いや、臯月らしい。

「分かった。帰ろう志紀」

フラリと立ち上がって校舎を後にした。

――――

――――

――

「志紀、気付いてる?」

「ああ」

誰かに尾けられてる。学校をでた辺りから。

「撒くよ」

曲がり角をいきなり曲がって、
上へ、塀に飛び、屋根に飛び乗った。

「・・・ッ!? 搜せっ」

「どこに行った!」

複数の男達が走り去って行った。

「アレ．．．何処だと思っ？」

「臥龍．．．．．」

やっぱり。

あいつらも馬鹿ね．．．

「面倒な所に会ったわね．．．臥龍」

二つの影は月に照らされ闇に消え去った．．．

Seven

「志紀、この部屋使っていいから」

臥龍を撒いた後、家へすぐ帰った。

「ルー、ご飯．．．．．」

ソファーに寝転がった志紀が言った。
冷蔵庫を確認してみるも、空。

「材料買って作るかコンビニ、ファミレス
どれがいい？」

「コンビニ」

相当お腹空いてるんだろうね、
いつもなら作ってって言うんだけど。

「分かった。行こう」

一番近いコンビニは歩いて五分の近場。
かなり便利でココに来て一週間も経ってない
けど何回も行っている。

「．．．．．ソレ」

夜道の中、志紀の視線は首もと。

「……………」

首からぶら下がっている二つの指輪が通った
ネックレス。

「有輝の葬式の時無かったから探した……」

一つは私の物もう一つは有輝の物。
同じ指輪が志紀の首にも掛かっている。

「ごめんね。ほら、着いたよ」

学校でもつけているけど制服で隠れて
見えなくなってる。

今は私服だから普通に見える。

「ルー、それだけ？」

コンビニに入り私が手に取ったのは
ミルクティーのみ。

はぁ……と志紀にため息をつかれて
渡されたのはメロンパン。

「いない」

「ダメ」

「いない」

「ダメ」

渋々レジに持っていった。

「あーっ！！！！！」

お金を出そうとした時叫び声が。
このコンビ二内で。

「瑠羽ちゃんと志紀くんだあ！！」

僕ねえジャンケンに負けちゃって
パシリにされちゃったんだあ」

山岸歩夢の事なんて聞いてないし。

「あ、そうだ！！二人共倉庫にこない？

ついでに拒否権ないからね」

答える暇も無いまま外見へ出て車に
乗せられた。勿論コンビ二でお金は払ったけど。

――――

――――

――

「みっんなーただいまあ」

私達は引き摺られる感じで

倉庫の幹部室つばいところに連れてこられた。

「おー歩夢おかえ．．．りって瑠羽ちゃん！！」

「瑠羽ちゃんこんばんは」

「は？」

「．．．．．」

山岸歩夢が中に入っていった事で
扉の前にいる私が見える。

志紀は扉の横にいるから見えないけど。

「ほら入って来なよ！！」

山岸歩夢が私の手を掴んでぐいぐい引つ張る
のが気に障ったのか志紀が空いてる手を
引いて引き寄せた。

「ルーに触るな」

必然的に志紀の姿も幹部室から見える。

「．．．え？あ、ごめん．．．？」

別にそこは謝るとこじゃないけど。
ただ志紀が独占欲強いだけだし。

「ねえ、聞きたい事あるんじゃない？」

さっきから加島昴は探る目で見てくるし
佐竹稜も見ってくる。

白崎陽に至っては睨んでくる。

「・・・・・・・・・・何もない」

佐竹稜が言葉発したの初めて聞いた。

「そう。じゃあ一つだけ言わせてもらおう。

尾行なんて悪趣味」

自分でも驚く位の冷たい声がでた。
きつと瞳も冷めてただろう。

「・・・・・・・・ッ」

目の前の五人が固まった。

「・・・・・・・・っ帰れ・・・・・・・・」

睨みが一層厳しくなったけど無意味。

「随分と偉い身分だね。

自分達が連れてきておいて帰れ？」

ま、帰らしてもらおうけど。

「帰れッ!！」

怒鳴り声に我に返った4人が白崎陽を抑えている。

「瑠羽ちゃん。悪いんだけど、

帰ってくれる?陽もこんなだし・・・」

加島昂、怒り。抑えきれないけど。
でも私は悪くないよ。本当の事だしね。

「さようなら」

E i g h t

ーガラッ

「「「「.....」」」」

教室に入れば全員こちらをむいて
半分睨まれてるっばい。

まあ？この学校ほぼ臥龍だからね。
昨日の幹部室での件でしょ。

「瑠羽ちゃんおはよー」

そこには幹部達もいるのは当たり前。
でもね、

「話したくないのに無理しなくても
いいのよ？.....山岸歩夢」

山岸歩夢は人懐っこくしてるけどバレバレ。
私の事、嫌いみたい。

「.....なんの事？」

ほら、声のトーンも落ちたし
口調も変わった。否、戻った。

「別に？」

鞆を机に置くと志紀に引っ張られて
教室をでた。

「志紀？どこ行くの？」

「……………」

「しーきー？」

ードンッ

「……………志紀？」

廊下の壁におしつけられた。

「……………ン…ッふ…あ…し、きッ」

いきなりキスされたけど初めてじゃない。
志紀には何度もされてる。

やっと唇を離したらジッと私の顔をみて
悲しそうに、

「俺、嫌い？」

と震えた声で聞いてきた。

「どうしてそう思うの？」

「だってルー俺放置したから．．．」

ああ、山岸歩夢と話してる時か．．．．．

「好きだよ。志紀いないと死ぬかも」

有輝が、有輝が殺された時も
死のうかと思っただし。今も、ね？

「俺も、死ぬ．．．」

大袈裟だと思うかもしれない。
だけど、これは本音だから。

「もう、俺の前から消えないで．．．」

ぎゅっと抱きついて来る志紀の香りに
安心して、胸に顔を埋めた。

「うん。約束」

「じゃあ俺とも約束して下さいよー」

．．．．．。

「．．．陸都」

「陸都、授業は．．．？」

教師という立場である陸都は今
今は授業中のはず。

「お二人がいなかったから自習にして
探しにきました」

やっぱり陸都は天然．．．．

「携帯、あるでしょ？」

番号変えてないから繋がるんだけど。

「あー！そうですね！気付きませんでした」

あははーと笑う陸都は子供っぽくて、
教師にはみえない。

「授業、しなきゃ駄目でしょ。教室帰るよ」

Nine

ガララッ

「志紀さんっなんで怒ってるんですか!？」

「…………。」

「志紀さぁ〜ん(泣)!!」

「うざ…………。」

ねえ、教室の人達ガン見してるよ？
これでもかって位目見開いてるよ？

「陸都、授業」

はぁ…………。面倒。

「あ、そうですね。席ついて下さい」

ずっと不機嫌な志紀にビクつきながらも授業を始めた。

「ルー授業サボりたい」

ぎゅっと抱きついて首に顔を埋めてきた。

あ、今の状況はというと

志紀が座った隣に座ろうとしたら

引っ張られて膝に乗せられた・・・って感じ。

「駄目だよ。陸都がまた探しに来る」

そうなればさらに不機嫌になる。

まったり抱きついてたのに陸都が乱入してきて不機嫌になってたんだから。

「こんなの出来る」

確かにココの授業は簡単すぎる。

今やってるところだって中学の範囲。

「寝ててもいいよ」

眠れてなかったと思うから……………
私が側にいなかった時。

「ん……………」

抱きしめる力が強まって寝息が聞こえた。
変わってないね、志紀。
有輝達と出会った時も私しか視界に入れなくて、
みんな頑張ってたよ？
話した時は凄く喜んでた。

「……………有輝……………」

私が、みんなが会いたい人の名は
授業が終わり煩い教室に掻き消された……………

「ルー……………」

「うん、行こう」

志紀に連れられて教室を出た。

ガチャ

ノックも無しに勝手に入っただのは理事長室

「勝手に入ってんじゃ・・・瑠羽っ!!」

殺気でたけど私って分かった瞬間
抱きついてきた。

「ルーに触んな馬鹿皐月」

馬鹿だね、皐月。学ぼうよ？
志紀もいるんだからね・・・

「ヒイイツ・・・い、嫌だ!!」

ドカツ

「つてえええ!!!!!!志紀酷え!!!」

自業自得でしょ。

志紀が強い事分かってんのに。

「嫌い」

私の手を握ってソファーに座った。
隣に座ると膝に寝転がってきた。

「ズルいいい!!」

何が? てか嫌い臯月

「...ル...」

ふわふわしてる志紀の髪を撫でると、
気持ちよさそうに目を閉じた。

...猫みたい。

最初は威嚇して、懐けば引っ付いてくる。

「うあー!! ココでイチャつくなあッ!!」

イチャつくって... そんな事してないし。

「ルー．．．ここも煩い」

不機嫌そうに私の手を握って扉を開けた。

「行くなら瑠羽を置いてけ！！！！」

皐月オール無視で。

ボタン．．．

「．．．．．。」

「．．．．．。」

「．．．．．。」

どこに行くのかわからないけど、
沈黙で進んでく。でもこの静けさは、
心地いいものだった。

キィィ

着いたのは、空に有輝に近い屋上．．．．
でもそこには

「臥龍……………」

呟いた瞬間志紀が私を後ろに隠した。

「お前に話がある」

佐竹稜がはっきりとした口調で言った。

こいつは似てるんだ、有輝に。

顔とか声じゃなくて総長としての雰囲気。

「私は無い」

有輝の顔が思い浮かんで、涙はでないのに泣きそうになって怖いから。

「俺がある。お前はなに怯えてる？」

ほら同じ。有輝も言ったよね、私達に。

【お前等は何に怯えてんだ？】

私と志紀。二人で大人人数と喧嘩してた。

「．．．まれ」

志紀が何かをいった。

「は？」

「黙れッ」

そんなに殺気だしていいの？
皐月や陸都が気付くよ。

ドンッ

「ッ．．．」

後ろにいた私が邪魔だったのか、
志紀に突き飛ばされた。
普段はしないけどキレると周りが見えなくなる。

「「「瑠羽！？」」」
ちゃん

椎名千年、山岸歩夢、加島昴が
寄ってこようとしたけど自分で立ち上がる。

志紀を止めないと・・・

「志紀・・・」

志紀に近寄った。

「瑠羽ちゃん危ないよ!!」

山岸歩夢の言葉も無視して近寄る。

ギョウ・・・

前から抱きついて静かに呼んだ。

「――志紀・・・」

「・・・あ・・・」

殺気がおさまって正気になった。

「ルー．．．ごめん．．．」

突き飛ばした事とキレた事を言ってるんだ
と思う。

「ん。大丈夫」

ちよつと背中がズキズキするけど
これくらい大丈夫。

「嘘．．．帰ろ」

それさえも分かっちゃうみたいだけど．．．

「家で冷やすから．．．」

「わかった」

T e n

「ルー．．．」

家に帰りソファでブーツとしてると
アイスノンと湿布を持った志紀が
眉を下げて近寄って来た。

「背中．．．見して」

言われた通りに服を捲って背中を向けた。

「．．．．ごめん」

シユンとする志紀はやっぱり仔猫。

．．．可愛い。

「大丈夫だよ」

ヒヤッと背中にアイスノンのあてられて
熱を持ってた所が気持ちいい。

「赤くなってる・・・」

じゃあアザになるかな。

それくらいどうも思わないけど。

冷たい感覚が離れて柔らかい感じがする。

ビクッ

「し、き・・・」

背中に唇を這わせてる事に気付くのに
少し時間がかかった。

「んっ・・・」

チクリと首筋に痛みが走ると共に
唇が離れて湿布が貼られた。

「ルー・・・背中、痛い？」

服も下ろされて前から抱きしめられてる。
優しく背中を撫でられながら。

「冷やしてくれたから大丈夫だよ」

志紀にふにやと笑いかけた。
多分、私が笑えるのは志紀の前だけ。

「ん．．．よかった」

ウトウトしてて眼も虚ろな志紀を見ると
眠いみたい。

「寝る？」

「ルーも．．．」

ベッド二つあるけど．．．．
でも志紀が近くににいる方がよく寝れる。

「いいよ。一緒に寝よ」

私の部屋のベッドに入って寝転ぶと
志紀も寄ってきたからスペースを開けようと
奥に詰めると引き寄せられた。

「離れないで」

哀しそうな声色に切なくなつて
ぎゅっと抱きついた。

「離れないよ」

優しく囁いて。

.....

「んぎゃー！.....！」

.....んぐ。

「る、るるる瑠羽?!」

教室に入って椎名千歳がこっち向いた瞬間叫んで、今この状況。

その叫びにこっちを向いた臥龍達も教室の奴らも陸都も固まってる。

「瑠羽さん！？そ、それ．．．」

それってどれよ。

「嫌だアああ！！！！」

勝手に叫んで泣きながら去っていった陸都．．．わけわかんない。

「えと．．．瑠羽ちゃん．．．？その首の．．．」

加島昂に言われた事もわけわからなくて手持ち鏡で指差されたトコをみた。

「．．．．．ああ」

納得。でもそんな気にする事？

「誰にやられたんだ！？俺が潰してやる！！」

なんでそんな怒ってんの？

「誰って・・・志紀？」

昨夜の冷やしてた時の首筋の痛み。
あれだと思う。

「・・・俺だけど」

眠そうだけど握ってる手は絶対離さないで
隣にいる。

「はあああああ！！？」

うるさいって・・・

「ちょ、何平然と言っちゃってんの!?

当たり前ですけど的な雰囲気おかしい!!

た、確かにスキンシップ多いけど、

まさかそんな関係だったなんて．．!

付き合ってたのか!? そうだよな?!

っ！か昨日も疑問だったんだけど!!

“家に帰る”って何!? 普通“送る”だろ!?”

マシンガントーク．．．うざ。

うざい。皐月並にうざい。

コイツラ嫌いだから尚更うざい。

「付き合ってないし．．」

私が付き合っただのは有輝だけ。

志紀も皐月達とは違うけれど．．．

「一緒に住んでるし．．」

「『ええええ!!!?』」

教室中の人間が叫んだ。

「じ、じじじゃあなんでキスマーク．．．？」

志紀に触られたりするの嫌じゃない。

むしろ安心するんだ。だから抵抗しない。

．．．皐月とかがやったらぶっ飛ばすけど。

「志紀の気分．．．？」

結構な気分屋だしね。

「気分でそうゆう事するの？」

志紀もかなり独占欲強いし．．．

わざわざこんな服で隠れないトコに

つけたのも他の男に触られないためでしょ。

「うん」

有輝や皐月、陸都、蜜、大翔みたいに

志紀も私も認めた人ならOKらしい。

有輝だけはキスしたり恋人らしい事をするのもよかったみたい。

「じゃあ瑠羽は処女じゃないのか・・・」

「・・・なにこいつ。死ねばいいのに。
この手で殺してあげようか？」

「・・・うつぎ」

つい声でちゃったし。

ほんとめんどくさい奴ら・・・
さつきからずっと白崎陽の視線が痛い。
視線ってゆうか睨まれてる？

「うつぎうつぎ。志紀、どっか行け」

とりあえず気持ちだけ表しといた。

「ひどい！あ、次りっくんの授業だから
サボらんほうがいいぜ？殺されるし・・・」

陸都？尚更都合がいい。
無言で携帯とりだして陸都のメモリーを

だした。

《ただいま電話に出る事ができません。

ピーツという発信音の・・・ブチッ》

なんで出ないわけ？

「志紀のでかけてみて」

・・・やっぱりでないらしい。

「仕方ないか・・・」

出来ればかけたくなかった。アレに。

「もし・・・《おっはよー！！いやぁー瑠羽から
電話してくれるとか感激！！》

「さっ・・・《マジこの世に悔いはない！！
今なら死ねる！！！！》

じゃあ死ねよ。

「り．．．《あ、んで何の用ー？》

ブチッ

《え．．．今なんか聞こえた．．．》

「臯月。陸都知らない？

知らないんだっ たら馬鹿に用はない」

《「ごめんなさい．．．

えと陸都はここにいます．．．》

「あつそ。じゃ、サボるって伝えて」

《．．．はい》

電話を切ると引きつった顔でこちらを見る
臥龍達。

「り、りつくん呼び捨て．．．？

臯月って．．．もしかして．．．．．」

．．．陸都の事今更？

「理事長．．．．．」

「そうだけど」

（（（（（瑠羽ちゃん何者？（（（（（

Eleven

千年sida

「みゆう．．．」

この状況．．何！？

「んーっ 稜きゅーん」

「ッ．．／／／／」

瑠羽が稜に抱きついて猫みたいになってる。
いつものツンツンしてるのとちがって
もの凄い甘えてるから稜が．．可哀想。

「瑠羽．．酔ってるだろ」

「えー??? 酔ってないよお？」

稜．．羨ましいけど、俺は理性持たない。
絶対。見てるだけでやべえし．．．

「なんで今にかぎってアイツいねえんだよ」

アイツ．．．海藤志紀。今日は休みらしい。
んでここは．．．俺ら臥龍の倉庫。

「志紀はねえ、今日風邪なんだよおー
お家でねんねしてりゅのお」

馬鹿に看病任せてりゅのおって言うてる
瑠羽の馬鹿って誰だよ？

「志紀があ寂しがるといけないから
早く帰んなきゃ駄目らのお」

あんなやつほっとけばいいのに．．．

「海藤が好きなのか？」

稜の眼が少し曇った。

「うん！だあーいしゅき！！！！」

そんな事に気付かない瑠羽は答える。

言葉は明るくても笑顔は全部作り笑いだけど。

「でもねえ好きなの・・・に

志紀の大切なひ、と・・・ちゃ・・・った」

・・・あれ？様子が、可笑しい・・・

「じゅめ、なさ・・・ハア・・・い・・・はっ・・・ゆき・・・」

「・・・瑠羽？」

「さっ、き・・・り、く・・・と・・・みつ・・・ひろ・・・と」

なんて言ってるかわからない。

過呼吸・・・おこしてる

「おい・・・アイツ呼べ！！早く！！！！！」

怒鳴ってる稜をあまりみた事なくて固まった。

「海藤？瑠羽ちゃんが．．．臥龍の．．．」

でも昴だけは瑠羽の携帯で海藤にかけた。耳に携帯をあててないこつちにも海藤の怒鳴り声が聞こえた。

「し、き．．．ッハア、志紀．．．」

10分もしないうちに下がうるさくなって海藤が来た事がわかる。

その間瑠羽はずっと海藤を呼び続けてた．．．

「ルー！！」

荒々しく扉が開いて海藤が入ってきた。

「つてめえら．．．！！」

瑠羽を抱きしめて俺らを睨む海藤の

殺気が半端なくて思わず震えた。

「紙袋持つてこい!!!」

稜が言つて昴が持つてきたけど
それを瑠羽が突き返した。

「志紀が．．．いれば、いない．．．」

海藤に抱きついている瑠羽の呼吸が
もとに戻つてきた。

それを見て胸が苦しくなった。

同時に瑠羽にこんなにも必要とされてる
海藤が羨ましくなった。

「ルー．．．落ち着いた？」

さっきとはうって変わって、
優しい声、優しい表情で話す海藤。

「うん．．．あれ、志紀熱は．．．?」

「あー．．．それは「志紀」？」

気まずそうに話す海藤を遮って、
知らない声が聞こえた。

．．．．．――――

溜羽 s i d a

「うん．．．あれ、志紀熱は．．．？」

「あー．．．それは「志紀」？」

過呼吸おこしちゃって気付かなかったけど
志紀って熱あるんじゃないの？
そんな疑問を抱いて聞いたら
ココにいるはずのない声が聞こえた．．．

「あ、みーつけ。ここってどっかの族の
溜まり場？なんでこんなトコにお前が
ってソレ．．．誰？」

大翔．．．．．

「顔見せてーっ」

蜜・・・・・・・・・・

「おい、駄目だつて・・やめっ」

ぐいつと肩を引かれて顔をみられた・・

「ルーちゃん・・？」

「え？こんなトコに姫がいるわ・・け・・ない」

扉の近くで溜め息が聞こえて目をやると
皐月と陸都。

「ルー・・ちゃん」

「姫・・？」

ルーちゃんって呼ぶのが蜜で
姫って呼ぶのが大翔。

「ふえ．．．ルーちゃんッ」

ぼろぼろ泣きだしちゃったし．．．
どうしよう．．．

「蜜？泣かないで。あ、どうしょ．．．
アメ持ってない．．．」

「ルーちゃッ．．．」

ああ．．．もう仕方ない．．．

ちゅっ

「泣き止んだ？」

蜜の頬にキスするとピタリと泣き止んだ。
そのかわり真っ赤になったけど．．．

「ッルーちゃん／＼／／」

抱きついてきたけど私は今志紀の膝に
いるわけでした．．．

「ルーに触るな蜜」

志紀に八エの如く叩き落とされる。

「．．．痛い」

「ルーも蜜なんかキスしちゃ駄目」

拗ねたようにいう志紀はやっぱり可愛い。

「頬っぺだか．．．ッんう．．．ふ．．．あ」

ありえないと思います。

普通人がいっぱい見てる前キスする．．．？

「ルーの全部俺のモノ」

有輝の馬鹿なところ除いて性格似てきたよ。

「だああ！！！！イチャつくなくなつつてんだろ！！

志紀お前俺らの前でキスするなんざ
いい度胸してんじゃねえか！！！」

．．．有輝の馬鹿な部分は臯月が似たんだよ。

「煩い。今日が初めてじゃないし」

ほんとにうざそうだけど、
嬉しそうな顔の志紀。

「それと！！いつ言おうか迷ってたけど、
瑠羽の首筋のキスマーク！！！！
あれお前が付けただろ！！！」

コレ付けられてからまだ今日で2日だし
消えるわけない。

「男除け。と俺のモノって印」

そついいながらまた首筋に舌を這わす。

「んんっ．．．ちよ、志紀．．．」

私が首とか耳とか弱い事わかっててやるから
志紀も相当なSだよ。

バシヤッ

「うみゆう．．．」

冷たい．．．てゆうかクラクラする．．．

「おい．．．それ．．．．．酒．．．」

白崎陽を除く臥龍、皐月達が思った。

（）（）（理性に負けそう．．．）（）（）（

「志紀だぁ．．．」

しかもさつきより質が悪い。

制服に酒を被ったから透けて下着が見える。

「んっ．．．やあ．．．し、きい．．．」

チクリと同じトコに痛みが走る。

「流石にヤバイ．．．」

さらに濃くなったその印を撫でながら
志紀が呟いた。

「

Twelve

「ッ．．．．．たあ」

．．．．．ここ、どこ？

頭ズキズキするし．．．体怠いし．．．

「ルー．．．」

耳元から聞こえた声の方を向くと、
眠そうな志紀。

「志紀ここどこ．．．？」

周りが見えないからわからない。

「俺の部屋．．．」

ああ、なるほどね。

私が全く知らない部屋で寝れるわけない。

ここは自分の家だし志紀の部屋か・・・

「昨日蜜達と会ったあたりから記憶飛んだ・・・」

過呼吸起こして、志紀がきて、蜜達と会って
その後・・・どうやって家に？

「俺らでここに帰った」

まあ、そつだよね・・・

「皐月達は？」

「皐月と陸都は学校。あとは・・・」

バンツ！！

「ルーちゃん見つけ！！」

蜜と大翔がきた。

「姫．．．おはよ」

蜜、重いよ。蜜も男なんだから私よりも
大きいんだよ？

「あーっ！！志紀ズルいつ」

蜜、朝からテンション高い．．．
頭に響く．．．

「俺もルーちゃんと寝たかった！！」

今度寝てあげるから静かにして．．．

「蜜あんまり騒ぐと姫が怒るよ。」

姫、二日酔いだろっし」

相変わらず笑顔が黒いね。

「大翔．．．蜜重い」

「はいはい」

「いーやーだぁあ!!」

一生の別れじゃないんだから、
そんな叫ばなくても・・・

「ルー大丈夫？」

「ん、大丈夫」

人が一人いないだけでこんなに静かになるの？

「大翔、ご飯作ってた」

そういえばいい匂いする。

少しお腹空いたしそろそろ起きよ・・・

「行こう。蜜も騒いでるし」

さつきからぎゃーぎゃー聞こえる。

ガチャ

「蜜．．．騒がないで」

頭痛い。

「ルーちゃんっおはよー!!」

駄目だ、無駄だった。

飛びつかれるのもキツイ。

「姫、水飲んで」

「ありがとう」

蜜が怯えてるんだけど．．．何したの？

「で？いくつか聞きたい事あるんだけど」

・ ・ ・そこはやっぱり見逃してくれないね。

「まず、志紀。いつから姫の居場所知ってた？」

「ここから、質問の攻撃が始まった。」

Thirteen

「大翔．．．痛い」

「後5分」

はぁー．．．もう足の感覚ないんだけど。
正座30分って厳しすぎ．．．

「ううゝ．．．ルーちゃん．．．．．」

今の私に助けを求めないでよ。
目の前に魔王がいるんだから。

「．．．．もういいよ」

「やったあー!!」

「はぁ．．．」

大翔のお許しがでて喜ぶ蜜と

溜息をはく志紀と私。

「姫と志紀は学校行く?」

「行かない」

質問攻撃と正座でもう昼だから行っても無意味

「わーじゃあ今日はずっと一緒!」

じゃあ今夜も無理か……
族潰し……

志紀が来てからずっとやってないのに。

「ルーちゃんとお出掛けしたいっ」

「姫、どうする?」

お出掛け……まあ今まで心配かけたし……

「行こう」

「やったあ!!!ルーちゃん大好きっ」

だからさ．．．蜜も可愛くても男なんだから
痛いし重い。

「蜜．．．うざ．．．」

ボソツと志紀が呟いて蜜を剥がした

「志紀ひどい!!」

「はいはい。姫、準備してきて」

「うん」

――――
その頃アノ人達は．．．陸都sida

「席つけ」

俺が教室に入ると静かになった。

「瑠羽さんと志紀さんはサボ．．．欠席」

ズルいよなあ。瑠羽さんというなんて・・・

「りつくくん瑠羽なんで休み？？」

うぜえ。てめえらに関係ねーし。
つかこいつらが原因だろうが。

「うるせえ黙れ」

昨日の瑠羽さんを思い出すとイライラが蘇る。
こいつらが瑠羽さんに関わるから・・・

「な、なんか怖いよ・・・」

フンッ当たり前だ。苛ついてるし。

「自習」

さ、行くか。理事長室、皐月の所に。

ガチャ

「おう陸都〜おかえり〜」

「……………」

キモイくらいニヤニヤしてるコイツ。

「不機嫌だな〜どうしたあ?」

この喋り方イラつく。黙れよ。

最近髪薄くなってもって気にしてるくせに……

「瑠羽さんが来ない……………」

つまらない。瑠羽さんがいないと。

瑠羽さんが消えてた間俺等は必死だった。

でも瑠羽さんに俺等が敵うわけなくて……

だからここに現れたとき驚いた。

「仕方ねえよ。蜜がいるんだしな」

蜜め……………つかなんで瑠羽さんは稜達といた?

どうせあいつらが連れてったんだろっけど。

「いいなよなあぜってえ出掛けてる」

「だよなあ」

Fourteen

「うるさ．．．」

これだからあんまり蜜達と繁華街に来たくない．．．パンダ達がうるさい。

「．．．．．。」

志紀も人嫌い特に女が嫌いだから不機嫌

「ルーちゃんなんか欲しいものないの??」

それに比べて上機嫌な蜜。

パンダ達はシカトしてるけど．．．

「服」

「じゃ、買いにいこっか」

スキップでも始まりそうな勢いで
手をひかれた。

ウィーン・・・

「いらっしやいませえ」

ここで買うの？

こんな女の子って感じの店で？
もっとシンプルでいいんだけど・・・

「ルーちゃんこれ着てみてっ」

「え・・・・・・・・」

蜜が持ってきたのは淡いピンクの
短めのワンピース。

私にピンクは似合わないと思う。

「ね？絶対似合うから！！」

仕方ないな．．．
こんな可愛い顔で“ね？”なんて言われたら
断れないでしょ．．．

「ふあ．．．眠い．．．．．」

とりあえず志紀は眠いらしい。
大翔はニコニコしながらみてる。

「わかったよ．．．」

仕方なく試着室に入った。
着替えて鏡でチェックしたけど変なところはない。
似合う似合わないは別として。

「ルー終わった？」

「うん」

これ渡した張本人消えてどこ行っただの？

「っ．．．．．！」

「え．．．？志紀？」

試着室から出ると志紀にすぐ戻された。

．．．．そんなに似合ってたない？

「んっ．．．ふ、う．．．」

「ルー．．．可愛い」

可愛いってありえないし．．．

それよりココ店だし試着室なのにキスすると誰かに見られる可能性があるのに．．．

「姫、それ蜜が買っただって。

だからそのまま着ておいて」

ほら、大翔がいた。

「わあ！！ルーちゃん可愛いっ！！」

きつと貴方の方が可愛いし。

「ねえ向こうのアレなあに？」

あの服にバッグとヒール、アクセサリーも
買ってくれてその格好で歩いてる・・・と、

キヤアアア！！！！

叫び声？が聞こえた。

「嫌な予感・・・」

聞き覚えのある声聞こえるしね。
確実にあいつら・・・佐竹綾達。
族の名前は忘れた・・・

「・・・姫。戻る？」

「戻る」

って言って戻ろうとしたのに・・・
どっかの馬鹿が。

「あー！！！！あれ瑠羽じゃん！！！！」

「え、ほんとだ！！溜羽」

椎名千年・・・眼がいらいしい。

ここからあそこまで結構距離がある。

人の顔が判別できない距離にいる。

「無視して」

「うん」

「・・・」

そのまま回れ右して歩いてった。

「離して」

はずなのに、

こいつなに？瞬間移動並の速さで動いた奴。

5、6秒前まで離れてたのに今私を掴んでる。

・・・佐竹稜。

「無理」

うざい。限りなくうざい。

「・・・・・・・・。」

無言で佐竹稜の手を払って私を引き寄せた
終始無言の志紀。

「ルーちゃん大丈夫??」

「うん」

蜜って過保護だよね・・・腕掴まれたただだし。
まあ私の周りにはみんな過保護だけど・・・

「姫、あいつら殺ってもいい?」

「駄目」

なんかキレてる大翔。
何に怒ってるの?

「お前らこないだもいたけど誰?」

「お前達に教える必要はない」

蒼龍は有名だったけど幹部、総長の顔は知られてない。
だから知らなくて当然。

「なんで女なんかに・・・」

これも気に食わない。
こいつらに興味なんてさらさらないけど
そこのパンダ女と同じにされてるのが嫌。

「・・・帰る」

こいつらに会って一気に疲れた。
もう帰りたい。

「ええ！？ルーちゃん待つてよお！！」

「姫、車いる？」

「寝る・・・」

車使う程の距離でもないし．．．
歩きでいい。

「．．．んツ．．．」

何された？今。

「ばーか」

こいつに．．．佐竹稜に何された？

佐竹稜にキスされた．．．

「あー！！！！お前俺らのルーちゃんに何するの！？」

「殺す．．．」

私も殴りたいけど眠いしかえりたい。

「別にいい。帰りたい」

「でもっ・・・」

「いいて言ってるの」

別に初めてなわけでもないし、
そんな気にする事でもないと思う。

「っなんでそんな冷静なんだよ」

した本人がなにいつてんだか。

「どうでもいいから」

なんか感情があるわけでもないし。
どうでもいいから寝たい。

「稜にキスされてどうでもいいっていう子
初めてみたあ!!」

「やっぱ瑠羽いいな!!」

なにがいいのか意味わからない。

「ふぁ・・・・・・・・」

眠い・・・・・・・・

「ルーちゃん、おいで」

ふらふらと蜜に寄ってった。

「寝ていいよ」

近くまでいったら持ち上げられて
横抱き・・・・・・・・所謂お姫様だっこされた。

「ん・・・・・・・・」

いつもなら降ろしてっていうけど、
今は眠い。寝たい。

そのまま眼を閉じた。

――――・・・

蜜Side

可愛いなあ。

「ん・・・」

俺の腕の中にいるルーちゃんを見て
つくづく思う。

「姫寝ちゃったし家に帰ろうか。
志紀も寝そうだし」

さつきからずっとうつらうつらしてる。
でもさすがに男を抱っこしたくない。

「ゆ、き・・・」

寝言、だよな・・・

・・・有輝を想ってるのは知ってるよ。
でもね、ルーちゃんが苦しんではかりじゃ
有輝が悲しむよー・・・

F i f t e e n

．．．．．なんだろう？暖かい。

「し、き．．．．」

お腹あたりを締め付ける感覚がして
目が覚めた。

「おはよ、ルー」

「ん．．．今何時？」

くるつと後ろを向いて、向き合う様に
寝転がった。

．．．．．近い。

「8時」

もう、蜜達帰ったのかな・・・
物音がしない。

「ご飯何がいい？」

「炒飯」

好きだね、炒飯・・・
どっか食べに行っても炒飯ばっか。
・・・わたしも似た様なものだけど。

「作るから待ってて」

で、起き上がろうとしたんだけど。

「・・・志紀？」

「俺もいく」

抑えられて動けなかった。

「作りにくい」

キッチンにきて炒めてるんだけど、
後ろからだきついてくる。

いつにもましてベツタリだな・・・

「・・・。」

炒め終わってお皿に盛り付け、
折りたたみ式の小さいテーブルに運んだ。

「どうしたの？」

いつもなら正面に座るのに今日は
私を膝に乗せた。

「ルーが、あいつらの所に行って・・・

俺・・・要らないって・・・」

夢、か・・・あいつらは臥龍の事だろう。
私が志紀を要らないなんて言うわけない。

「志紀が私を必要としてくれる限り私は志紀から

離れないよ」

志紀に要らないって言われたら私は．．．．．
どうなるんだろう？

きつと生きる事をやめる。

有輝がいなくなつて、壊れて．．．
でも志紀や皐月達が存在で生きてる。

「俺がずっと一緒にいろつて言ったら．．．」

「いるよ」

志紀といられるなら本望。

“愛してる” 志紀が昔私に言った。
でもその時私は有輝を失った絶望で、
応えなかった。

「ルー．．．愛してる」

今も有輝を愛してる。
でも、同じくらい．．．、それ以上に
志紀を愛してる。

「．．．．私も」

「え．．．．」

なんで驚く？

「俺、は有輝じゃ．．．ない．．」

「知ってる」

もしかして私が志紀のキスを受け入れるのは
有輝と重ねてる、とか思ってたのか。

「じゃ．．あ、なんで．．」

「志紀だから好き」

よくキスしたり触ったりしてくるけど、
それ以上はしてこない。

それは、有輝に遠慮してるんでしょう？

「ッ．．．ルー．．．．」

「ん？炒飯冷めるよ」

志紀の膝に座ったままお皿を手にとって
食べ始めた。

まだ暖かい・・・

「ありがとう・・・ルー」

「ん・・・」

優しい笑顔を見せてくれて、一瞬魅入ると
軽く唇にキスされた。

「ツん、ふ・・・っ・・・う・・・」

離れたと思えばまたすぐキスされて、
いつもみたいな深いキスじゃなくて
噛み付くようなキスがくりかえされた。

「はあっ・・・」

唇が離れた時にはもう力が体から抜けてて

動けなかった。

お互い好き合っても私達に付き合つとかない。
この関係は変わらないから。
何も、変わらない。

だけど．．．今まで以上に触れてくると思う。

「．．．ッ．．．」

「ルーは、俺の．．．」

また首筋にキスして印を残した。

S i x t e e n

「志紀．．．暑い」

「．．．。」

「もう．．．」

ほら、陸都が泣きそう。

「志紀さんっ．．．授業聞いてくださいいい」

朝からずーっと引っ付いてくる。
別に嫌じゃないけど暑い。

「うう．．．体育祭の種目決めるので、
自分で決めてくださいよ?」

無視され続けた陸都はシュンとしながら
黒板に種目を書きはじめた。

面倒だな・・・サボろうか。

「志紀どれやるの？」

「面倒・・・」

言うと思った。

「瑠羽さん！！サボっちゃ駄目ですよ！！」

「・・・嫌」

「退学になりますよ！？」

「・・・いんじゃない？」

「・・・決めただけ決めてください」

それは出なくてもいいって事だね。

「まず、騎馬戦やる人」

「「「はいっ！！！！」」」

クラスのほとんどが挙げてる．．．．
そんなに騎馬戦好きなの？

「瑠羽ちゃん勘違いしちや駄目だよ？
騎馬戦って言っても殴り合いみたいな
ものだから」

って説明してる山岸歩夢もキラキラした
顔で手挙げてるけど。

臥龍達も佐竹稜と加島昴以外挙げてる。

「騎馬戦の奴ら他の競技にも出るよ？
次、500mリレー」

こんな感じで決めていったんだけど、
私は500mだけのつもりが借り物競争も。
志紀は800mと陸都に無理矢理騎馬戦。

「絶対サボる．．．」

てゆうか志紀が殴り合いに出たら
重傷者大量にでると思う。
強いからね。

「ふあゝ．．．眠い」

昨日はお昼よく寝ちゃったから夜寝れなくて
寝不足になってしまった．．．

「．．．俺も」

もちろん昨日一緒に寝てた志紀も同様。

「．．．お前ら昨夜何やってたんだよ」

椎名千年の質問は無視して立ち上がる。

ここじゃ寝れないから理事長室行こう。

「志紀さんっ瑠羽さんっ!？」

どこいくんですかああゝ!!」

教室をでるとき叫び声が聞こえたけど
聞こえないフリ。

アレに関わると面倒だし。

S e v e n t e e n

「臯月、ベッド借りる．．．」

「どーぞ．．．って志紀も一緒なのか!？」

こっちも何か叫んでるけど無視。
眠いし、めんどいし。

「．．．志紀、暑いって．．．」

ベッドに寝転がっても抱きしめられたまま。
本気で暑いから。

「．．．。」

もーいいや．．．睡魔が．．．

「スースー．．．」

目を瞑ればすぐ寝れた。

――――
志紀 side

「ルー……」

昨日は驚いた。

今まで俺がルーに触れても嫌がらないのは俺を通して有輝を見てるって思ってたから。

俺だから受け入れてくれてた事に、とても嬉しさを感じた。

「ん……志紀……」

「え？」

寝言で俺を呼んだのは初めて。
いつも有輝を呼んでて苦しそうだった。

今までルーは有輝のモノだったから色々やりすぎない様に制御してきたけど、

ルーは俺に愛してるって言った。

「ありがとう．．．ルー」

一人ぼっちだった俺。

一人ぼっちだったルー。

ルーと出会って一人ぼっちじゃなくなった。

それから有輝達と出会って、

ルーが有輝と付き合うようになっても俺の側にいてくれた。

有輝も良い気なんてしないのに、黙って見守ってくれた。

皐月、陸都、蜜、大翔．．．

直接言ってやらないけど感謝してる。

「愛してる」

眠ってるルーにキスして立ち上がった。

―――．．．．．
瑠羽 side

「んー．．．ふあ．．．」

目が覚めてボーッとしてると変化に気付いた。

「志紀．．．．．？」

あの温かい体温が、無い。
どこ行つた．．．？

私から離れる事なんて、無かつたのに。

「志紀っ．．．」

急に不安が襲つてきてベッドから飛び出した

「ど」

理事長室を出て教室に向かう。

「はあっ．．．．．」

いない、どうして？

このくらいの距離を走ったくらいで、焦りと不安で息切れし始めた。

「あれ、瑠羽ちゃん？どうしたの？」

「志紀．．．っ．．．見なかった？」

加島昂が焦った私を見て寄ってきた。
いつもなら聞いたりしないのに、
いきなり消えた不安で聞いていた。

「海藤？知らないけど．．．」

志紀も私が消えた時こんな不安だったの？

「え、瑠羽ちゃん！？」

携帯、お願い．．．出て．．．

《ルー．．．？》

「っ．．．志紀．．．」

よかった．．．

《．．．どうした？》

「どこにいるの．．．？」

《．．．．．教えられない》

「な、んで．．．．．」

教えられないって事は私と会えないって事？

「志紀．．．っ．．．．．！！」

《ルー、すぐ帰るから》

志紀の“すぐ”は数分、数時間じゃない事は知ってるんだよ。

数日、もしかしたら数ヶ月。

「ついなくなるの……」

《……少しやる事があるだけ》

枯れたはずの涙は、

また私の大切な人が遠ざかる事によって
溢れてきて。

「……っ……う……」

《ルー泣かないで……ちゃんと帰るから》

「約束したのにつ……」

《……ごめん》

お互いもう離れないって約束。

《でも……俺一人でケジメ付けたんだ》

「絶対……帰ってきてよ」

《帰ってくるよ》

なんのケジメかなんて分かってる。

志紀の家族の問題だから。

電話を切って誰もいない廊下に
ズルズルと座り込んだ。

「．．．っ．．．く．．．う」

昨日いきなり愛してるなんて言っただ理由も
昨日と今日ずっと抱き締められてた理由も
全部わかった。

「志紀．．．」

また笑えなくなるけど許して。
貴方がいないと無理だから。

「愛してる．．．」

いつのまにか右手の薬指に通されてる
ネックレスの指輪とは違う指輪。
左手じゃない所が志紀らしい。

指輪の内側に彫られた言葉。

l o v e y o u f o r e v e r .
(あなたを永遠に愛します)

E i g h t e e n

「おい、瑠羽また潰したんだってな」

「・・・・・・・・・・」

志紀がいなくなつて2週間。
夜は蒼桜として毎晩族潰しをしてる。

「・・・・・・・・なあ、辛いのはわかるけど
志紀が帰ってきた時お前がボロボロだと
あいつはどう思う？」

わかつてる。

やり過ぎてる事くらい。

でも、やめられないから仕方ない・・・

「それに瑠羽にあれほど執着してたあいつが
自ら離れたんだ。

あいつだって辛いはずだろ」

後から聞いた話では私以外はこの事を
知ってたらしい。

．．．忘れてた。

近くにいる人が急に消える事がこれほど
怖い事だった事を。

有輝の時に思い知ったはずだったのに。

「大丈夫ですよ瑠羽さん！！」

いくら志紀さんでも体育祭出なかったら
留年ですから！！」

陸都、そんな事言っても明後日だよ。
体育祭。

「．．．．．ありがとう」

今、授業中だけどこれ以上二人に
気遣わせたくないし教室戻ろうかな。

「じゃあね．．．」

教室にいと千年、歩夢、昴が

話しかけてくる。

いつの間にか少し仲良くなったりするから
自分でも驚き。

「瑠羽ちゃん！！昂が怖ーい！！」

こうやって歩夢が抱きついてくるのも
日常になった。

「ん．．．昂、あんま怒っちゃ駄目だよ」

「．．．馬鹿が二人いると大変なんだよ．．．」

白崎陽には嫌われてるけど、
前みたいに睨まれる事はなくなった。

「．．．．．瑠羽」

稜は口癖みたいに用も無いのに私を呼ぶ。

「何」

「．．．．．」

「．．用が無いなら呼ばないで」

たまに倉庫に連れてかれたりして、
悪い奴らじゃない事はわかったけど
やっぱり志紀の側が一番安心できる。

「るーう 今日帰り俺の家寄ってかない？
いい事し「死にたいの？」

「．．．．．イエ、昂様滅相もない」

こいつらの馬鹿なやりとりが蒼龍と
たまに被る。

「瑠羽ちゃん??どうしたの？」

「．．なんでもない」

無意識の内に私が族潰しのターゲットを
決めるとき、最近は臥龍の敵の中でも
汚い族を潰してる。

「もうすぐで体育祭だね!!頑張ろうね!」

「ん．．．」

体育祭は好きじゃない。

暑いしなによち面倒くさい。

「瑠羽ちゃんは走るの速い？」

「普通．．．」

そういえば臥龍と蒼龍は連合を組んでたらしい。

だから有輝や皐月達の事を知ってる。

私と志紀がいた事は知らないって

皐月から聞いた。

「俺速いんだよ！！見ててね！！」

「うん．．．」

「歩夢ばかりずりぞー！！」

瑠羽！！俺も見てるよ？」

このうるささにイラっとする時もある。

「ほらあんま五月蠅いと瑠羽ちゃんが
怒るよ?」

まあ、嫌いじゃないけど。

Nineteen

体育祭当日――・・・

「溜羽さん・・・」

志紀はいない。

「・・・大丈夫。ちゃんと出る」

志紀が一人で頑張ってるんだから、
私は待たないといけない。

「溜羽ちゃん！！こっちこっち！！」

「歩夢、暑苦しいよ」

「むーっ 昴涼しそうじゃなかー！！」

「暑いよっ？」

テナントに入ると、
本を読みながら歩夢の相手をしている昴。
昴に突っかかっている歩夢。
なんか死んでる白崎陽。
椅子に座って寝てる稜。

「．．．．自由」

千年はさっき女に囲まれてるのを見た。

「瑠羽ちゃん」

語尾にハートが付きそうな勢いで
歩夢が抱きついてきた。

「．．．暑い」

「今から障害物リレーなんだあ！
出るから見ててね！！」

「ん、わかった」

返事をする、元気に走っていった。

「……………」

目線を下にやると、指輪が目に入って
グツと苦しくなる。

「……………瑠羽」

「……………」

「海道を信じる」

「……………」

「必ず帰るって約束したんだろ？」

なによ、寝てたんじゃないの。
なんでわかるの、私の不安が。

「……………分かってる」

それでも時々思ってしまう。
家族の問題が解決したら、
そのまま戻ってこないんじゃないかって。

「あいつはお前を裏切ったりしねえ」

稜はそれだけ言っただけ寝はじめたから私も歩夢の競技を見た。

「たっだいまー！！見てた？！見てた？！」

「おかえり。うるさいよ歩夢」

「昴はどうでもいいの！！」

瑠羽ちゃん、見てた？？」

まったく・・・なんていいながら本を読む
昴は完全にお母さん。

「・・・速かったね。でも怪我してる」

頬が切れてて血が滲みかけてる。
そこに触れると歩夢が真っ赤になった。

「あ、わ・・・っ／／／」

「……………」

今日は暑いし日焼けした？

「／／ほらほらっ瑠羽ちゃん行かなきゃ！！

500mリレー並んでるよ！！」

ぐいぐい押されて日向に出された。

「……………暑……………」

ずっと日陰にいたからか、
急に暑くなってクラクラする。

《パンツ》

第一走者が走り出した……………確か私のクラスは、
臥龍の幹部補佐の旭。

私はアンカーにされた。

「暑……………」

この炎天下の中突っ立ってるとか死ぬ。

「．．．やっ」と

やっと私の前の列が戻ってきた。

バトンを受け取って走る。

暑いから本気じゃないけど、
一位だから問題ない。

「瑠羽ちゃん速ーい!!」

どっかから聞こえてきた声は多分歩夢。

一位のままゴールした。

「っ、はあ．．．」

ちょっと体がヤバイけど。

「あ．．．」

視界が暗くなつていく時に
臥龍の皆が焦つて走ってくるのが見えたの

――――

「．．．ん．．．．．」

「よかつた．．．起きた」

「――．．え、」

目を覚ますと保健室で、

「ルー．．．ただいま」

隣にいるのは待つてた人。

「つー．．．志紀．．．っん．．．」

触れるだけのキスをして抱き寄せられた。

「倒れた原因は栄養失調、睡眠不足、過労
それに精神的に不安定だった？」

「……………」

こんなに喋る性格じゃないのに。
怒らせた？

「…………臥龍と仲良くなってるし」

いつからいたの？

「…………他の男に触るし」

歩夢に触った時？

「…………ルーは俺のなのに」

「んっ…………ふ、あ…………ッ…………」

唇が離れた時はもう酸欠状態で、
頭は真っ白だった。

「瑠羽が族潰し毎晩やってるって聞いた」

．．．どうせ臯月あたり。

「何も食べないし寝てないって」

食べてない事もないし、2、3時間寝てる。

「そんな事してたらルーの体がもたない」

「．．．志紀がいないとダメ」

食べないって言っても喉に通らないから仕方ない。

寝ないって言っても眠れない。

「これからはずっといる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3314s/>

ありがとう

2011年9月3日14時39分発行